

英米文学鳥類考：ヒバリについて

梶田 隆宏

(人文学部国際社会コミュニケーション学科)

A Study of Birds in English and American Literature: The Lark

Takahiro MASUDA

(The Dept. of International Studies, Faculty of Humanities and Economics, Kochi University)

(1)

ヒバリ（全長約17センチ）はスズメ（全長約14.5センチ）よりも大きくツグミ（全長約24センチ）¹よりは小さい鳥で、頭頂には思いのほか立派な冠羽を備えてはいるが、その羽毛の色は地上性の鳥に似つかわしく雌雄ともに「住んでいる地面の色とよく似た」²地味な色彩である。このように地味な色をしたヒバリ、換言すれば、見た目はスズメと同様一向に目立たないヒバリが古今東西、私たちにとって最も馴染みのある野鳥の一つとなっているのは、言うまでもなくその美しい鳴き声³のためである。博物学者のハドソンは英国を代表する鳴鳥（声の美しい鳥）として「クロウタドリ、ナイティンゲール、ヒバリ、ヌマヨシキリ」⁴の4種を挙げている。

とはいえ、ヒバリのヒバリたる所以は、まず何よりも、英語の skylark という言葉や《美空ひばり》という歌手の芸名から窺い知ることが出来るように、その美声が「空」と不可分に結びついているという点にある。具体的に言えば、ヒバリとは「青空高く舞い上がりながら（いわゆるアゲヒバリ）、素晴らしい声で楽しそうに春の喜びを歌いあげる代表的な鳥」⁵であり、「揚げひばり声も姿も光となりて」⁶という俳句は、春の風物として有名なヒバリの姿を余す所なく捉えている。ちなみに、「ヒバリ科は15属75種からなるスズメ目の1グループで、極地以外のほぼ全世界に広く分布している」⁷。が、我が国で見られるヒバリは、この科の代表種である「ヒバリ」一種のみであり、その名の由来は「日晴」^{ひはる}、つまりこの鳥が晴れた日に空高く昇って鳴く習性にある⁸とされている。

次に、ヒバリは《泰西の鳴鳥＝「小夜鳴き鳥」もしくは「夜鳴き鶯」^{うぐいす}》として我が国でも良く知られているナイティンゲールと同様、その名を天下に知られた美声の「春告げ鳥」である。しかし、ナイティンゲールは「夜鳴く鳥」であるのに対して、ヒバリは夜明けを告げる「朝告げ鳥」であり、しかもその鳴き声は「勝ち誇ったようなさえずり」⁹とか「銀の鎖——無数の音の輪の、切れ目なく連なった」¹⁰「歯切れのよい澄み切った調子」¹¹と形容される、歓喜に溢れた音色を特色とする。つまり、ヒバリは〈空〉や〈光〉と結びつく、上昇的で躍動感に溢れた「飛翔のシンボリズム」である、と同時に〈美〉や〈喜び〉を与える「春告げ鳥」にして「朝告げ鳥」なのである。『世界シンボル大事典』は「朝の澄んだ光の中で飛ぶ姿は、青春の熱気、熱情、生きる喜びの発露を感じさせ……人間が幸福へ向かう勢いを象徴する」¹²と述べている。だとすると、「至福」を意味する英語慣用句：“as happy as a lark” が端的に示すように、たとえ青い鳥ではないにしても、ヒバリは疑いもなく「幸福をもたらす鳥」¹³、換言すれば〈幸福のシンボル〉と言えよう。

と見てくれば、文芸の世界に登場するヒバリもまた、明暗のイメージやシンボルを併せ持つナイティングールやフクロウなどの夜の鳥とは異なり、圧倒的に「明」一色のイメージで覆い包まれ、詩人や文人たちから最大限の注目と賛美を浴びてきたのも首肯できる。「文学の世界においてヒバリほど人気のある鳥は他にはありません……彼ら（感受性が豊かで詩情に満ちた作家たち）はヒバ리를「文学」で人気のある鳥の筆頭に置きました」¹⁴ という『シェイクスピアの鳥』の著者グッドフェローの言葉や「ヒバリほど、シェイクスピアに注目された鳥はほかにないだろう。彼の作品からヒバリに言及している詩行をすべて列挙したら、おそらく読者を飽きさせてしまうだろう」¹⁵ という『シェイクスピアの鳥類学』の著者ハーティングの言葉は、その何よりの証左である。このシェイクスピア以外の英米の文芸作品でヒバリと関連する有名なものと言えば、シェリーの『ヒバリに寄せて』、ワーズワースの同名の詩、それに我が国でも上田敏の訳で大変よく知られているロバート・ブラウニングの『ピッパが通る』（日本語訳は『春の朝』）等々、米文学ではウィラ・キャザーの小説『雲雀の歌』となろうか。キャザーから見よう。

(2)

既に見たように、〈空〉・〈光〉・〈美〉・〈春〉・〈朝〉・〈喜び〉と結びつく幸福な「飛翔のシンボリズム」、換言すれば「時は春、日は朝」の明澄な光に満ちた世界で、歓喜に溢れ、快活に嘯りながら、まっしぐらに地上から空高く舞い上がってゆくヒバリの躍動的な姿から、第一に思いつくのは上昇的な青年の夢であり、「アメリカの夢（成功の夢）」である。ピーター・ミルワードは「ヒバリは文字どおり天にも達する野望に身を焼いて、こんな低劣な生活などには我慢がならず、卑賤の大地などはるか眼下に捨てさって、高く、高く、雲のただ中へと姿を没するのだ……「少年よ、大志を抱け！」というクラーク博士の有名な忠告を、これほど見事に実践している鳥も……ほかにはちょっと見当たらない」¹⁶ と述べている。このクラーク博士と同様〈若者よ、大志を抱け〉という強い信念を持ち、一度ならず二度までも「目も眩むような」¹⁷ 大願成就を果たしたアメリカの作家がウィラ・キャザーである。

彼女は自分の故郷であるネブラスカの西部辺境と旧大陸ヨーロッパから来た農業移民を「基本素材」として、ノスタルジアの思い豊かに開拓者たちの栄枯盛衰の姿を描いたが、新大陸に於ける開拓者たちの世界こそ正しく「アメリカの夢」、「成功の夢」に捉われた世界であったと言えよう。それは、キャザーが作中人物に語らせている自己の信念：「願望は創造である」¹⁸、平易に言い換えれば「私の人生哲学とは、私たちが毎日毎日いわば、われ知らず一つのことを思い、その計画を立ててゆくと、いずれはそれを手に入れるものだ、ということなのです……私たちの偉大な西部は全て、そのような夢から発展してきたのです」¹⁹ という言葉を見ても明らかである。このキャザーの描いた、自伝的色彩の濃い小説の一つが『雲雀の歌』（1915）であり、その内容は「丸太小屋から大統領へ」という「アメリカの夢」を実現させた非凡なオペラ歌手の物語である。地上の俗界から一気に青い天空を目指して上昇しつつ「勝ち誇ったような」美しい声で「希望を歌うことによって、希望を創り出す」²⁰ 青春の鳥、ヒバリ。それに、壮大なアメリカの夢を胸に秘めながらも、別名「美の司祭」²¹ と尊称されるほどに生涯〈美〉の世界を追求し続けたキャザー。と見てくれば、後半生の絶望的な「成功のパラドックス」とは未だ無縁の、若い彼女が描いた自伝的要素の濃いアメリカ的「成功物語（“a success story”）」²² に対して『雲雀の歌』という表題が付けられているのは極めて自然なことであろう。

とはいえ、これはアジアやヨーロッパに住む人々に当てはまる話²³ であり、アメリカ本国では通用しないようだ。というのも、ヒバリはアメリカ大陸には分布せず、一般にアメリカで lark と言

えば、skylarkではなく meadowlark、つまりムクドリモドキ科マキバドリ属のマキバドリを意味するからである²⁴。マキバドリについて『小学館ランダムハウス英和大辞典（第二版）』は「ムクドリモドキ科マキバドリ属 *Sturnella* の米国産の鳥の総称；背と翼は褐色を帯びた黒色、胸は黄色；澄んだ調子のよい鳴き声で知られている」²⁵と載せている。larkという文字を共有し、その鳴き声が「美しい (melodious)」という点では共通点があるにしても、meadowlarkはskylarkとは科も属も異なる鳥²⁶なのである。だとすれば、キャザーの *The Song of the Lark* を読んだ一般のアメリカ人読者が、この“lark”の解釈のいかんにかかわらず、「“lark”の歌＝ヒロイン（オペラ歌手）の美しい声」と考えたとしても何ら不思議なことではなかろう。というのも、そもそも彼らの国では揚げヒバリなど現実には存在しないのだから。キャザーが後に述べた「表題は失敗でした……なぜなら、読者たちは“lark”の歌とは「ヒロインの歌の芸」を指しているのだと思い違いをしていたからです」²⁷という言葉は、その確かな証左である。そもそも『雲雀の歌』という表題自体が作者の自作ではなく、フランスの絵画からの借り物なのである。では、この借り物の表題に込められたキャザーの意図とは何であったのか。この点に関して、評伝学者のウッドレスは次のように述べている。

“She (Cather) had already decided to call it *The Song of the Lark*. She had seen in the Chicago Art Institute Jules Breton’s painting of a peasant girl stopping on her way to work to listen to the bird. The title was intended to ‘suggest a young girl’s awakening to something beautiful.’”²⁸

（キャザーは既に（今度出す）本を『雲雀の歌』と名付けることに決めていた。彼女は昔シカゴ美術館で（フランスの画家）ジュール・ブレトンの描いた（『雲雀の歌』という題名の）絵画、つまり一人の百姓娘が野良仕事に出掛ける途中、立ち止まって、じっとヒバリの鳴き声に聞き入っている姿を描いた絵を見たことがあった。表題に込めた彼女の意図は「若い娘の美に対する目覚めを暗示することにあったのだ。）

と見てくれば、『雲雀の歌』のアメリカ人読者のみならず作者のキャザーの側にも、表題と「アメリカの夢」との関連が皆目見て取れないのは自明である。いかにフランスの文化に心酔していた作家とはいえ、日常的に揚げヒバリとは全く無縁の国で生まれ育ったキャザーにとって「ヒバリ」と言えば、即声の美しい異国の鳥そのものであったのであろう。彼女の評伝作家で有名なウッドレスが1970年に出した『ウィラ・キャザー：その人生と芸術』の中で「囀るヒバリはウィラ・キャザーの人生と作品に幾たびも登場するモチーフであり、常に願望、切望、憧れを象徴している」²⁹と明言しながら、それから17年後に出した決定版『ウィラ・キャザー：一文学的人生』ではこの箇所を削除しているのは注目に値する。この賢明な評伝学者はキャザーの作品の表舞台は、その基本素材から言っても飽く迄もアメリカ大陸であり、したがって、彼女の作品に登場する lark を skylark と見なすことの過ちに気がついたのであろう。一例を挙げれば、新大陸の西部辺境と人間を称える『おお、開拓者よ！』の冒頭に掲げられた作者自作の詩に登場する lark³⁰ を skylark と捉えている評者は少なくはないが、しかし物語の舞台を考えれば、この lark が skylark ではなく meadowlark であることは自明である。したがって、“the larks over the plowed fields”の箇所は「畑の上を飛ぶ雲雀」ではなく「畑の上を飛ぶマキバドリ」と解さなければならないのである。では次に、英文学の世界に登場するヒバリについて見てみよう。この世界でヒバリと言えば、シェリー (Percy B. SHELLEY [1792-1822]) の詩、『ヒバリに寄せて』 (*To A Skylark*, 1820) をその筆頭に置くことに誰も異論はあるまい。具体的に見てみる。

(3)

Hail to thee, blithe Spirit!

Bird thou never wert,
That from Heaven, or near it,
Pourest thy ful heart

In profuse strains of unpremeditated art.

よくぞ来りし、楽しさに充てる精霊よ!

汝は鳥にはあらで
天空かあるいはその近くより、
汝の胸にあふるる情を歌いいずる
たぐいまれなる技のゆたかなる調べにのせて。

Higher still and higher

From the earth thou springest
Like a cloud of fire;
The blue deep thou wingest,
And singing still dost soar, and soaring ever singest.

高く高く、なおより高く
大地より汝は舞いあがる、
火焰のごとくなりて、
汝は紺碧の天空に舞いあがり、
歌いつついや高くのほり、のほりつつ絶えせずに歌う。

In the golden lightning

Of the sunken sun,
O'er which clouds are bright'ning,
Thou dost float and run;
Like an unbodied joy whose race is just begun.

西に沈みし太陽の
黄金色なす光の中に——
その上空には雲が明るくかがよいてあり——
汝は浮び漂い、また駈ける。
肉体を抜けいで嘗てもなかりしものの歓びのごとく。

The pale purple even

Melts around thy flight;
Like a star of Heaven,
In the broad daylight
Thou art unseen, but yet I hear thy shrill delight,
うす紫の夕空は

汝の飛べるあたりにて色うすれる。
 天空の星が
 ま昼におけるがごとくに
 汝の姿は見えざれども、なお汝のはげしき歓びの歌は聞こゆる。

Keen as are the arrows
 Of that silver sphere,
 Whose intense lamp narrows
 In the white dawn clear
 Until we hardly see—we feel that it is there.
 白銀色しろがねなす天空の
 箭光は強烈なれども、
 その強き光は
 晴れたる白色の光の中にては色あ裾せて、
 ついには見えずなりて、そこに光のあるを感ずるなり。

All the earth and air
 With thy voice is loud,
 As, when night is bare,
 From one lonely cloud
 The moon rains out her beams, and Heaven is over-flowed.
 大地も天空もひとしく
 汝の声にどよめきわたる。
 恰も何ひとつ見えぬ夜空に
 一片のはなれ雲のかげより
 月がその光を注ぎて天空に充ちあふるるがごとくに。

What thou art we know not;
 What is most like thee?
 From rainbow clouds there flow not
 Drops so bright to see
 As from thy presence showers a rain of melody.
 汝が何ものなるや、われらは知らず。
 汝は何にいとも似たるか？
 虹の雲よりは、かくも目にさやかなる
 雨滴は降り来らず、
 汝の居るあたりより妙なる調べたまの降りそそぐがごとき——。

Like a Poet hidden
 In the light of thought,
 Singing hymns unbidden,
 Till the world is wrought

To sympathy with hopes and fears it heeded not:

かがやかしき思想に
没入したる詩人が
うるわしき詩を歌い、
ついには誰も気付かざりし
希望と恐怖とをもて世人を共感せしむるごとくに。

Like a high-born maiden

In a palace tower,
Soothing her love-laden
Soul in secret hour
With music sweet as love, which overflows her bower:
高貴なる生れの処女が
宮居の高殿において、
ひそかなる時に恋に悩める魂を、
その高樓にみちあふるる
恋のごとき甘き調べもて慰さむるがごとくに。

Like a glow-worm golden

In a den of dew,
Scattering un beholden
Its aerial hue
Among the flowers and grass, which screen it from the view!
露ふくむ小さき谷の中にて
黄金色なる土蜃が
人目につかざるように
掩いかくす、花や草の中にて
淡き光をあたりにまき散らすごとくに。

Like a rose embowered

In its own green leaves,
By warm winds deflowered,
Till the scent it gives
Makes faint with too much sweet those heavy-winged thieves:
緑の葉に掩われ、
温き風のために花卉の散りし
バラの花が、あまりにもかぐわしき
薫りをおこして、その匂いを含み
重たげに吹く風を風ぎしずまらしむるごとくに。

Sound of vernal showers

On the twinkling grass,

Rain-awakened flowers,

All that ever was

Joyous, and clear, and fresh, thy music doth surpass:

きらきら光る草の葉にそそぐ

春雨の音、

雨に目を覚せし花など――

すべてそれらは

喜ばしく、清新にして、生々としてあれども、汝の調べがうちまさるよ。

Teach us, Sprite or Bird,

What sweet thoughts are thine:

I have never heard

Praise of love or wine

That panted forth a flood of rapture so divine.

われらに教えよ、小妖精ともいうべき鳥よ、

汝の胸のうちは何と楽しきかを。

われはかつて聞きしことあらじ、

かくも崇高にして滔々と

あふるる歓びを歌いでたる恋や酒の賛歌を。

Chorus Hymeneal,

Or triumphal chant,

Matched with thine would be all

But an empty vaunt,

A thing wherein we feel there is some hidden want.

婚姻の合唱も、

凱旋の頌歌も、

汝の歌にくらぶれば、すべてみな

うつろなる高言にすぎずして、

何かもの足らざるを感ずるたぐいなるなり。

What objects are the fountains

Of thy happy strain?

What fields, or waves, or mountains?

What shapes of sky or plain?

What love of thine own kind? what ignorance of pain?

汝の幸福なる歌の

泉のもととはそもいかなるものか?

いかなる野畑か、浪か、はた山々か?

いかなる形の大空か、あるいは野原か?

汝が種族の愛とはいかなるものか? 苦悩についてはいかに無知なるや?

With thy clear keen joyance

Languor cannot be:

Shadow of annoyance

Never came near thee:

Thou lovest—but ne'er knew love's sad satiety.

汝の晴れやかなる、強きよるこびには

倦怠はあり得ざらん。

困惑の影は

汝のそばには来らざるべし。

汝は恋をなすべし—されど、恋に倦み飽きし悲しさを知らざるべし。

Waking or asleep,

Thou of death must deem

Things more true and deep

Than we mortals dream,

Or how could thy notes flow in such a crystal stream?

目覚むるも眠れるも、

汝は死につきては、われら

死すべき運命きだめもつものの想像するよりも

更に真実に、かつ深刻なるものを思うなるべし。

然らずば、いかで汝の調べが、かくも澄みわたれる流れとなりて湧きいでんや?

We look before and after,

And pine for what is not:

Our sincerest laughter

With some pain is fraught;

Our sweetest songs are those that tell of saddest thought.

われらは前を望みうしろを顧み、

在りもせぬものにあこがれる。

われらのいと真摯なる笑いすらも

何らかの苦悩くるわをふくむ。

われらのいと愉たのしき歌も、いとも悲しき思いを語るものなり。

Yet, if we could scorn

Hate, and pride, and fear;

If we were things born

Not to shed a tear,

I know not how thy joy we ever should come near.

たとえされども、仮令われらが

憎悪、高慢、そして恐怖おそを軽しめうるとも——

よしやわれらが涙を流さぬように

生れたるものなりとも、

われはいかにして汝の喜びに近づくべきやを知らず。

Better than all measures

Of delightful sound,

Better than all treasures

That in books are found,

Thy skill to poet were, thou scorner of the ground!

よろこばしき^{がく}楽の音もてる

あらゆる音楽よりも、

書典の中に見いださるる

あらゆる宝よりも、

汝の巧みなる調べは詩人にとりてまされるよ一汝、地大をかるしめるものよ！

Teach me half the gladness

That thy brain must know,

Such harmonious madness

From my lips would flow

The world should listen then—as I am listening now.³¹

汝の頭脳が必ずや知れる

その歓びのなかばたりともわれに教えよ、

さすれば、調和のとれしその熱狂的な歌が

わが唇より流れいで、

世をあげて耳傾けん、今われ聞きいるごとくに。³²

一読して自明のごとく、この詩は徹底したヒバリ賛歌であり、その賛歌の核心はヒバリ特有の〈美声〉と、その美声が奏でる幸福な〈喜び〉、それに天空から声はすれども姿の見えない光の鳥、ヒバリの〈神々しさ〉にある。ヒバリの美声について詩人は「きらきら光る草の葉にそそぐ春雨の音、雨に目を覚せし花など——すべてそれらは喜ばしく、清新にして、生々としてあれども、汝の調べがうちまさるよ」と最高の賛辞を贈っている。が、何よりもこの詩で賛歌されているのは〈喜びの鳥〉としてのヒバリである。それは「ヒバリ」と係わる形容詞や名詞：“blithe”（快活な）、“an unbodied joy”（肉体のない喜び）、“shrill delight”（激しい歓喜）、“music sweet”（耳に快い妙なる音）、“a flood of rapture so divine”（かくも神々しい歓喜の洪水）、“happy strain”（幸福な歌声）、“clear keen joyance”（明澄な喜び）、“joy”（喜び）という言葉を見ても明らかである。この美声と歓喜の鳥、ヒバ리를詩人が「鳥」ではなく「精霊」と呼んでいるのは、一にも二にもこの鳥の持つ上昇的な「飛翔のシンボリズム」、換言すれば、名だたる鳴鳥の中でもヒバリだけが「声も姿も光」となる点にある。こうしたヒバリの特性について我が国の文豪漱石も「あの鳥の鳴く音には瞬時の余裕もない……其上どこ迄も登って行く、いつ迄も登って行く……登り詰めた揚句は、流れて雲に入って、漂うているうちに形は消えてなくなって、只声丈が空の裡に残るのかも知れない」³³と述べている。

天と地の間位置するのが空（天空）であるとするなら、卑賤の地界から神の住処である天界を目指して空高く舞い上がり、やがて歓喜に満ちた妙音のみを残して蒼天の光の中に消えゆくヒバリの姿。これは紛れもなく「肉体のない」「神々しい」鳥と呼ぶのに相応しいものであろう。この

点について『動物シンボル事典』は、ヒバリとは「肉体を持たない鳥の典型……「天空に生きるもの」……どの鳥にもまして天空の神の嘉する鳥である」³⁴と明言している。ちなみに、この《神に最も祝福された鳥=ヒバリ》という宗教的な公式は、神と仏との違いはあれ、我が国の文芸にも該当するようである。中勘助の『鳥の物語』に出てくる「ひばりの話」である。要約すれば、以下のような内容である。

昔々中將姫ちゅうしゅうひめという、大層情け深くて信仰心の厚い姫君が居られた。しかし、あまりにも評判の善人であったが故に、いわれなき讒言ざんげんを受け、父の大臣によって人里離れた山奥に捨てられ、野垂れ死にする運命にあった。この姫君の命を救い、無実の罪をはらすことに努力したのがヒバリである。ヒバリは当時「翼が弱くて高くは飛べず、また歌うことも囀ることも知らず、ただ、チャッ、チャッと鳴くばかりのやくざな鳥」³⁵でしかなかった。しかし、ただ姫君の命を救いたい一心で、来る日も来る日も、朝から晩まで空飛ぶ練習を重ね、翼の限り、声の限りを尽くして天の阿弥陀に救いを求めた結果、中将姫は最終的に命を救われ、無実の罪をもはらすことが出来た。このヒバリの善行が阿弥陀に認められて、彼らは今のような美空の歌い手になった、という。その辺の事情を中勘助は次のように述べている：「汝ら小鳥らよ、汝らの良き行いの報いによって汝らは鳥のなかのいみじき歌いてとならん。今より歌舞の菩薩の音楽の調べを学んで汝らの歌を青空高く響かせよや」³⁶。では次に、ワーズワースの詩『ヒバリに寄せて』(To the Skylark, 1803)を見てみよう。この詩で言う今一つのイメージ・シンボルは《ヒバリ=賢者、知恵》という公式である。具体的に

(4)

Ethereal Minstrel! pilgrim of the sky!
Dost thou despise the earth where cares abound?
Or while the wings aspire, are heart and eye
Both with thy nest upon the dewy ground?
Thy nest which thou canst drop into at will,
Those quivering wings composed, that music still!

To the last point of vision, and beyond
Mount, daring warbler!—that love-prompted strain
—'Twixt thee and thine a never-failing bond—
Thrills not the less the bosom of the plain:
Yet might'st thou seem, proud privilege! to sing
All independent of the leafy Spring.

Leave to the nightingale her shady wood;
A privacy of glorious light is thine,
Whence thou dost pour upon the world a flood
Of harmony, with instinct more divine;
Type of the wise, who soar, but never roam—
True to the kindred points of Heaven and Home! ³⁷

（靈妙なる樂人、空の巡礼者、
 憂いに充つる地上を汝はさげすむや、
 または、翼は空高く舞い揚がれど、
 心と眼は露しげき地上の汝の巢とともにあるにや、
 そこへとふるえる翼をたたみ、歌やめて、
 汝は思いのままにくだり宿る。

影深き森を夜の鶯に任せよ、
 輝く大空こそ汝の浮世離れたる住家。
 かしこより汝は一きわ聖なる本能もて、
 美しき歌声を溢るるばかりにこの世に注ぐ。
 実に天と地との仕事を忘れざる汝こそ、
 高く舞い上がれど、さ迷わぬ賢者の姿。)³⁸

アト・ド・フリースの『イメージ・シンボル事典』はヒバリを「知恵の象徴」と見なす根拠として、「アテナが、顕現するときの姿の1つ」と共に、このワーズワースの詩の一文：「“Type of the wise, who soar, but never roam”（高揚するが、決して漫然と過ごさない流儀の賢者）」³⁹を挙げている。この書物は西洋人の心象表現に関しては我が国でも良く引き合いに出される書物であるだけに、ヒバリは何故に賢者と呼ばれ知恵を象徴するのか、今少し具体的に考えてみる必要がある。ワーズワースによれば、それは「舞いあがっても、彷徨いあるかず、天と家との連なる点にそむかない」⁴⁰点にあるという。だとすると、詩人は、この鳥の上昇的な飛翔の姿を称えながらも、ヒバリを「賢者」と呼ぶ彼の力点は、それとは逆の翼をたたんだ降下の姿にあり、ヒバリとは「制約状態から無制約への移行」⁴¹を意味する「飛翔」の鳥というイメージとは裏腹に、つまる所、地上の巢に縛られた天の鳥ということになる。それは「そこ（地上の巢）へとふるえる翼をたたみ、歌やめて、汝は思いのままにくだり宿る」という詩人の言葉を見ても明らかである。ヒバリ特有の飛翔や美声とは無縁の、落下（“drop into”）の姿を諷うロマン派の詩人。この結びつきには何か心に釈然としないものが残るが、ヒバリの習性を考えれば《ヒバリ＝賢者、知恵ある者》という詩人の主張にも今一つ説得性が欠けるのも否めない。というのも、ヒバリが「非常に賢い鳥」と言われる第一の理由は、この空の鳥の降下の姿ではなく、地上の巢への降り方にあるからである。「雲雀は非常に賢い鳥で、空から地上におりるとき、いきなり巢には下りないで、少し離れた所に着陸する」⁴²という言葉はその証左である、と同時に天下に知られた衆知の事実でもある。

ヒバリという同じ春の風物を取り上げながら、この詩がシェリーの詩に比べて今一つ人口に膾炙されていないのは、その辺にも理由があるのだろうか。両者は日本語訳では同名になるにせよ、ヒバリに付く冠詞に違いがあるのは意味深長である。世に言うヒバリ賛歌とは、この鳴鳥の上昇的な飛翔時にこそあるとするなら、それとは正反対の下降時には負の要素が付随するのも首肯できる。ヒバリの鳴き声に精通した、我が国の古老は「ひばり」は野鳥の中でも、鳴禽類の筆頭をつとめるものであるが、その鳴き方が陽気で長鳴きをすることは人の知る通りであって、その鳴き、囀り方には、上がり鳴き、下り鳴きの二つに大別されている。上がり鳴きとは、「ピイチク、ピイチク」という高低音が連続して、かすかに聞こえる空中まで上がっていくのであって、下り鳴きとは、「ツキニウシユ、ツキニシュウ」というような一種の哀音である。多くの人々は、「ひばり」の囀り声といえば、まず、上がり音を指し、下り音を併せて語る人は少ない⁴³と指摘している。では、地上の巢に縛られた空の鳥という見方を一歩進めて、地上に於けるこの鳥の習性を見てみることに

よって《ヒバリ=賢者、知恵》の裏を探ってみたい。『イソップ寓話集』に「雲雀と農夫」という小話がある。

(1) 英語版「雲雀と農夫 (WHEN A MAN MEANS BUSINESS)」

A lark once made his nest in the green corn and fed his young on the tender shoots till they had crests on their heads and were fully fledged. One day when the owner inspected his land he saw that the crop was ripe and dry. 'It's time now,' he said, 'to call together all my friends to help me with the reaping.' One of the lark's crested chicks heard him and told its father, bidding him find another home to which they could move. 'There's no need to think of going yet awhile,' replied the father; 'the man who trusts friends to do a thing is in no great hurry about it.' When the farmer came again and saw the ears of corn dropping off in the heat of the sun, he said that he would hire reapers and sheaf-carriers the next day. 'Now it's really time for us to go somewhere else,' said the lark to his babies, 'when he relies on himself instead of his friends.'⁴⁴

(2) 日本語版「^{ひばり}雲雀と農夫」

雲雀が若草の中に巣を営んでいた。明け方には黒頭雲雀の^{さえず}囀りに唱和し、すでに冠も生え羽根も強くなった雛を、麦の葉で育てていた。鳥の主が見回りに来て、^{こがね}黄金に色づいた稔りを見ると、「取り入れに仲間の衆を呼び集める時だ」と言った。冠を生やした小雲雀が一羽、これを聞いて父親に告げ、自分たちをどこに移すか考えて欲しい、と頼んだ。父親はしかし、「まだ逃げなくていい。仲間を頼りにする人は、そんなに急いでいないものさ」と言うばかり。

鳥の主が再びやって来て、麦の穂が陽の光を浴びて、はやこぼれそうになっているのを見ると、次の日刈り手を雇うこと、束の運び手も雇うことを段取りした。すると雲雀が幼い子らに言うには、「今こそ本当にここから逃げる時だ。仲間を当てにせず、自分で刈るというのだから」。⁴⁵

この寓話に込められた教訓の意味は簡単明瞭であるが、問題は数ある鳥の中でここでは何故にヒバリが主役を務めているのか、という点にある。その疑問は、〈鳥類学〉の基礎知識：つまり《ヒバリ＝「木にとまらない鳥、地上に住む鳥であって、非常に警戒心の強い鳥」、「あしは長く、つめもよく発達している、ことに後指のつめが長い」「大変賢い鳥」》ということ踏まえた上で、英国版の『野と森の鳥』にある一節：“Being terrestrial in habit the skylark builds its nest, made of grasses, on the ground, in any suitable depression. In harvest time the nest is frequently disturbed or destroyed, and the attentive parents have to carry their young, in their claws, to a safer home.”⁴⁶ (ヒバリは地上性の鳥で、地面の適当な窪みに草でできた巣を作る。収穫時には巣が荒らされたり、壊されたりするのは屢々である。そのため注意を怠らない親は雛を足指の爪で掴んでより安全な住処へと運ばなければならない)を読む時、氷解する。『イソップ寓話集』とは人類共通の古典であり、「動物に仮託して人間生活の諸相を描いた」傑作とはいえ、「雲雀と農夫」に於ける物語の内容と動物の選定に思いをはせる時、さすがはイソップと感服せざるを得ない。

ちなみに、『聖書』そのものにはヒバリは全く登場していないことから判断すれば、この鳥は少なくとも古代ヘブライ地方には分布していなかったものと思われる。とはいえ、これまで見てきたヒバリにまつわるイメージやシンボルを思い見れば、この名鳥がやがて西洋のキリスト教世界で吉鳥として迎えられてゆくのは至極もっともなことである。「キリスト教では(ヒバリは)聖職者の謙讓を意味する」⁴⁷ というフリースの指摘や「フランチェスコ会修道士たちにとっては、雲雀は労

働における喜びの象徴であった]⁴⁸ というジャン＝ポール・クレベールの言葉は、その紛れもない証左である。では次に、シェイクスピアの作品に移ろう。

(5)

彼の作品の中でヒバリは「少なくとも15編の戯曲と2編の詩に登場する」⁴⁹ と言われている。が、ヒバリそのものが主役を演じている訳ではないので、焦点を絞って簡潔に見てみる。まず最初に、別れの朝を迎えて恋人のロミオに語るジュリエットの言葉：“Some say the lark makes sweet division; / This doth not so, for she divideth us: / Some say the lark and loathed toad change eyes; / O! now I would they had changed voices too, / Since arm from arm that voice doth us affray, / Hunting thee hence with hunt's up to the day”⁵⁰ (ヒバリは美しい旋律をうたうという人もある、でもあのヒバリはちがう、私たちを引き裂く歌ですもの。ヒバリはヒキガエルと目をとりにかえたという人もある、ああ、それなら声もとりにかえてくれたらよかったのに。あの声は私たちの腕を引き離し、朝を呼び、あなたをここから追いたてる意地悪な歌ですもの)⁵¹ から、1) ヒバリは声の美しい鳥である、2) ヒバリは朝告げ鳥である、3) 巷間には「ヒバリの美しい小さな目と、ヒキガエルの醜い大きな目とが取り替えられた」⁵² という言い伝えがある、という三点が見て取れる。では、①「声の美しい鳥」、②「朝告げ鳥」、③「天空の鳥」としてのヒバリの姿を個別に見てみる。

最初に、①「声の美しい鳥」として：(1) “your tongue's sweet air / More tuneable than lark to shepherd's ear, / When wheat is green, when hawthorn buds appear” (あなたの舌は甘い調べ、麦は緑に、サンザシのつぼみがほころびるころ、羊飼いの耳に聞こえてくるヒバリよりも美しい音楽)⁵³ 『夏の夜の夢』1幕1場；“sing as sweetly as the lark” (ヒバリのよう美しく歌う)⁵⁴ 『ヴェニスの商人』5幕1場。

次に、②「朝告げ鳥」として：(1) “the lark, the herald of the morn” (ヒバリ、朝の到来を告げるさきぶれ)⁵⁵ 『ロミオとジュリエット』3幕5場；(2) “Fairly king, attend, and mark: / I do hear the morning lark” (王さま、そろそろ時間です、いまのは朝のヒバリです)⁵⁶ 『夏の夜の夢』4幕1場；(3) “merry larks are ploughman's clocks” (ヒバリの歌は農夫の目覚まし時計)⁵⁷ 『恋の骨折り損』5幕2場；(4) “a lark, / That gives sweet tidings of the sun's uprise” (朝の日の出を告げるひばり)⁵⁸ 『タイタス・アンドロニカス』3幕1場；(5) “The night to the owl and morn to the lark less welcome” 「フクロウが夜空を、ヒバリが朝を歓迎する以上に歓迎するぞ」⁵⁹ 『シンペリン』3幕7場；(6) “Lo, here the gentle lark, weary of rest, / From his moist cabinet mounts up on high, / And wakes the morning, from whose silver breast / The sun ariseth in his majesty” (ごらん、眠りに飽きた優しい雲雀は、その露に濡れた巣を出て、天に向かって飛び立ち、朝を呼び覚ませば、暁の銀の胸からは太陽が荘厳に昇る)⁶⁰ 『ヴィーナスとアドゥニス』。ちなみに、「朝告げ鳥」としてのヒバリはチョーサーの『カンタベリー物語』にも登場する：「夜明けの使者であるひばりは、いそがしそうにさえずって、白む黎明に挨拶をする」⁶¹。

第三に、「天空の鳥」として：(1) “Hark, hark! the lark at heaven's gate sings” (東の空に高らかにさえずるヒバリをお聞きなさい)⁶² 『シンペリン』2幕3場；(2) “Look up a-height; the shrill-gorged lark so far / Cannot be seen or heard: do but look up” (見あげてごらんなさい、さえずるヒバリもこう遠くでは姿も見えず声も聞こえない)⁶³ 『リア王』4幕6場。「天空の鳥」とは「幸せの鳥」でもあることは次の詩句を見ても明らかである：“Like to the lark at break of day arising / From sullen earth, sings hymns at heaven's gate” (すると我が心は夜明けがたに暗い

大地から舞いあがる雲雀のように、天の門口で讃歌をうたいたすのだ⁶⁴【ソネット集29番】；ちなみに、「天空の鳥」としてのヒバリはミルトンの『失樂園』にも登場する：「汝ら、天国の門をめざして歌いつつ昇る鳥（ヒバリ）たちよ⁶⁵」。

以上、キャザー、シェリー、中勤助、ワーズワース、イソップ、シェイクスピア、チョーサー、ミルトンと文学を中心にヒバリの姿を見てきたが、文人と博物学者を兼ねるハドソンはヒバリをどう見ているのであろうか。『ダウンランドの自然』に以下の文章が見られる。

It is when listening to the music of the larks that we are best able to appreciate the wonderful silence of the hills, and the refining effect of long distances in this pure thin atmosphere on the acutest and brightest birds sounds.⁶⁶

(ダウズ（イングランド南東部に広がる草地の丘陵地帯）の素晴らしい静けさと、この清浄で薄い大気の中で声張り上げて朗々と囀るヒバリの妙音に及ばず長い距離の効果、換言すれば、澄み切った大気の中でヒバリが地上高く舞い上がり、この上もなく朗々と声を響かせるからこそ、その歌声は更に一段と妙なるものとなる、という二つの真価が最もよく分かるのは天空から聞こえてくるヒバリの妙なる調べに耳を傾ける時である。)

ハドソンにとって、ヒバリが最もよく似合う風景とは頭上高く蒼天を頂く、明澄で静寂な草原のようである。が、それにしても、この天空の鳴鳥と結びつけてダウズの自然の美と静けさを賛美するとは、如何にも南米のパンパスで生まれ育ったこの人らしい着眼である。彼は「野鳥が人の心を動かすのは、翼を持ったきれいな姿や、調和のとれた色彩や、優美で軽やかな空中での動作もさることながら、その声によるところがとても大きい。鳥の囀りに特有の、透明な、顫音の、よく通る音質は、他の音には類のない感動を呼び起こす。囀りによってはこの特徴がとりわけすぐれていて、しばしば人種、国籍、性格、人生の目的などを超えて聞き手の心を差し貫き、人類に共通の一つの情緒を暗示しさえする」⁶⁷と述べているが、ヒバリがその賛美に最も値する鳴鳥の一つであることだけは確かである。

(6)

ハーティンガは「ヒバリはナイチンゲールに劣らないほど、詩人に靈感を与えている。チョーサー、スペンサー、ミルトン、シェリーそしてワーズワースらは、こぞってこの評判高い鳴き鳥、ヒバリへの賛歌を歌う」⁶⁸とヒバリを絶賛しているが、この止まる所を知らない賛歌の中で一体この空の鳥はどこまで舞い上がって行くのであろうか。ヒバリは春、朝、青春の熱気、躍動、快活、大志、自由、美、歓喜、神聖、知恵などを表す「明」一色の鳥であり、詩人や文人たちから最も愛され、賛美されるだけではなく、「どの鳥にもまして天空の神の嘉する鳥」だとするなら、そのイメージの行き着く先は、幸せに満ち溢れた喜びの世界、換言すれば、無上の楽天主義の世界であるとしても何ら不思議ではあるまい。ロバート・ブラウニングの詩『春の朝』（1841）は正しくその証左である。上田敏の名訳を見てみよう。

The year's at the spring
And day's at the morn;
Morning's at seven;

時は春
日は朝
朝は7時

The hill-side's dew-pearled;	かたおか 片岡に露みちて
The lark's on the wing;	あげひばり 揚雲雀なのりいで
The snail's on the thorn:	かたつむり 蝸牛 枝に這ひ
God's in the heaven,	神、そらに知ろしめす
All's right with the world! ⁶⁹	すべて世は事も無し。 ⁷⁰

この詩が彷彿させるものは「春の朝のすがすがしい光に満ちた世界」⁷¹ そのものであり、「すべて世は事も無し」と謳歌する詩人の思いの底にあるものは、紛れもなく楽天主義の世界観である。ここには大伴家持の歌：「うらうらに照れる春日にひばりあがり心かなしもひとりし思えば」⁷² に見られる春愁めいた哀しみなどは絶無である。このブラウニングの楽天観は彼の「生来の気質によるところが多い」⁷³ にしても、文学とは時代を反映するものでもあるとするなら、この『春の朝』はその典型的な一例と言える。というのも、「五十年代が始まると共に、イギリスは有卦に入って、前後に類を見ない繁栄を見ることになった」⁷⁴ からである。「イギリスは19世紀の50年代と60年代に自由貿易の最盛期を迎える。文明の進歩と繁栄を謳歌する声の高まるなかで、「すべて世はこともなし」と歌ったロバート・ブラウニングの詩句のように、ヴィクトリア女王の治世はその黄金時代を迎えたのであった」⁷⁵ という言葉は、その何よりの証左である。だとすると、漢名でヒバリのことを「告天子、叫天子、天雀、噪天」と並んで「楽天」⁷⁶ と言うのも宜なるかなである。

それにしても、この舞い上がってしまったヒバリは一体今どこへ消えたのであろうか。春が巡り来れば、懐かしい草花が可憐に顔を出し、畑の麦は嬉々として風に踊る。しかし、一茶に「美しや雲雀の鳴きし迹^{あと}の空」⁷⁷ と詠ませた主人公は、待てど暮らせど、声も聞こえなければ姿も見せない。ある新聞は「ヒバリなどの繁殖地激減」⁷⁸ という見出しのもとに、日本野鳥の会の調査では、この20年間（1978～1998）で我が国ではヒバリの繁殖地域が激減し、その原因は農地や草原の減少と農薬の使用等による環境破壊にある、と報じている。洋の東西を問わず、人間に最も馴染みのある野鳥の一つであり、また文芸の世界でも鳥類最高の人気役者として歴史に残る数多の大役を演じてきた名優のヒバリ。しかし、この鳥はその不滅の名声とは裏腹に、今まさにその姿をこの地上の一角から急速に消しつつあるのである。近年の英語ブームにもかかわらず、我が国の若者たちの間で英米文学への関心や興味が枯れ細り、人の世に潤いがなくなったのも、このヒバリの激減という憂慮すべき現象が何処かで深く関わっているのではなからうか。

（注）

- 1 各鳥の体長に関しては、手元の中村登流・行田哲夫『野鳥検索小図鑑：山野の鳥』（講談社、1984）と志村英雄・山形則男・柚木修『野鳥ガイドブック』（永岡書店、1999）を参照したが、三種の鳥の体長に関する数字は両者ともに全く同一である。
- 2 『朝日＝ラルース 世界動物百科（鳥類）』（朝日新聞社、1972）第83号、p. 16；荒垣秀雄『四季の博物誌』（朝日新聞社、1988）、pp. 58-59：「日本のヒバリは、この類としては草の多いところに住む習性を持っているが、それでも草丈の高い草原には住もうとしないし、林内には決して入ることがない。このように地肌に見えるような場所で生活する鳥にとって、一つの問題は、猛禽や肉食獣の目からどうやって隠れるかである。対策の一つは、土の色に似た羽色をして目をくらますことであろう。ヒバリ類の地味な羽色は、まさに砂や土の色なのである。実際、アラビアのサバクヒバリは、黒い溶岩地では非常に暗色であり、白い砂地では非常に淡い羽色をしている」。
- 3 参照：蒲谷鶴彦・松田道生『日本野鳥大図鑑：鳴き声 333（下）』（小学館、1996）、p. 11：「ヒバリは、たいへん細かな変化に富む短い声をさまざまに組み合わせて、5～10分間もさえずり続ける。声紋を見ると、

- 「ビル」とか「ピィ」という振動音を2.4秒間に十数回も鳴いていることがわかる。さえずりの全体では、数え切れない声を休みなく鳴いていることになる。これは呼気と吸気の両方で鳴くことができるためである。
- 4 W. H. ハドソン『鳥たちをめぐる冒険』黒田晶子訳 (講談社、1977年)、p. 215.
 - 5 土居光知・福原麟太郎・山本健吉監修・成田成寿編集『英語歳時記 (春)』(研究社、1970)、p. 161.
 - 6 この句は長い間中村草田男の句とと思っていたので、今回確認のために『中村草田男全集』に当たってみたが、見つけることが出来なかった。ご存じの方は是非ご教示下さい。なお、よく似た句に「日輪に消え入りて鳴く雲雀かな」(横田正知編『写真俳句歳時記 (春)』〔教養文庫、1977〕、p. 82) という蛇笏の句がある。
 - 7 『朝日＝ラルース 世界動物百科 (鳥類)』第83号、p. 16.
 - 8 参照：(1) 伊東四郎『四季の博物誌』(家の光協会、1973)、p. 85：「(貝原益軒による)『日本釈明』(1699)という本によると、雲雀は「日の晴れたときに空高くのぼって鳴くので、「日晴」が本当の名前である」といい、すなわち日晴がヒバリに転じ、これに雲雀の字があてられたものらしい」；(2) 荒俣宏『世界大博物図鑑 (第4巻) 鳥類』(平凡社、1987)、p. 292：「和名は、晴天時に高く飛翔して鳴くことから、「日晴る」の意で名づけられた」。
 - 9 『朝日＝ラルース 世界動物百科 (鳥類)』第83号、p. 19.
 - 10 W. H. ハドソン『鳥たちをめぐる冒険』、p. 184；以下の原文参照：*Adventures among Birds* (J. M. Dent & Sons, 1951)、p. 173：“Meredith says of the lark’s song that it is a/silver chain of sound/Of many links, without a break.”
 - 11 『朝日＝ラルース 世界動物百科 (鳥類)』第83号、p. 20.
 - 12 ジャン・シュヴァリエ、アラン・ゲールブラン『世界シンボル大事典』金光仁三郎・熊沢一衛・小伊戸光彦・白井泰隆・山下誠・山辺雅彦訳 (大修館書店、1996)、pp. 826-827.
 - 13 アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』山下主一郎主幹、荒このみ・上坪正徳・川口絃明・喜多尾道冬・栗山啓一・竹中昌宏・深沢俊・福士久夫・山下主一郎・湯原剛訳 (大修館書店、1984)、p. 72.
 - 14 ピーター・グッドフェロー『シェイクスピアの鳥』井上れい子訳 (成美堂、1995)、p. 57；以下の引用文は、英文学に於いてはヒバリが古くからナイティンゲールを凌駕する名鳥、鳥類界で最高の地位を占める重要な鳥であることを示す一証左である：Leonard Lutwack, *Birds in Literature* (Univ. Press of Florida, 1994)、p. 51：“For English poets the skylark became more important than the nightingale. This change may be noted as early as 1804 in a passage from Blake’s *Milton* in which the skylark takes precedence over the nightingale as the leader of the ‘Choir of Day.’”
 - 15 ジェイムズ・E・ハーティング『シェイクスピアの鳥類学』(博品社、1996)、p. 161.
 - 16 ピーター・ミルワード『ミルワード氏の動物記』安西徹雄訳 (新潮社、1977)、pp. 174-175.
 - 17 ウィラ・キャザー『教授の家』安藤正瑛訳 (英宝社、1974)、p. 15.
 - 18 同上、p. 18.
 - 19 ウィラ・キャザー『迷える夫人』榊田隆宏訳 (大阪教育図書、1998)、p. 179.
 - 20 ジャン＝ポール・クレベール『動物シンボル事典』竹内信夫・柳谷巖・西村哲一・瀬戸直彦/アラン・ロシェ訳 (大修館書店、1971年)、p. 294.
 - 21 佐藤宏子氏は、その著『キャザー』(冬樹社、1977)に「美の司祭」という副題を付している。
 - 22 James Woodress, *Willa Cather: Her Life and Art* (Univ. of Nebraska Press, 1970)、p. 167.
 - 23 参照：『朝日＝ラルース 世界動物百科 (鳥類)』第83号、p. 19：「この鳥 (ヒバリ) は、ヨーロッパのほぼ全域、北極圏以南のアジア全域、北アフリカに分布し、北方のものは渡り鳥となっている。日本では留鳥か漂鳥で、全国各地の草原や畑にすんでいる」。
 - 24 参照：(1) 英和辞書 *JENIUS* (大修館書店、1995)：“lark” = 「ひばり (の類)、ヒバリに似た鳥 ◆ヨーロッパやアジアでは skylark、アメリカでは meadowlark を主に指す」；(2) 土居光知・福原麟太郎・山本健吉監修・成田成寿編集『英語歳時記 (春)』、p. 161：「イギリスでは skylark も lark もヒバリであるが、アメリカでは lark はよく meadowlark を意味する」；(3) 奥田夏子・山崎喜美子・蒲谷鶴彦・川崎晶子『野鳥と文学 — 日・英・米の文学にあらわれる鳥 —』(大修館書店、1982)、pp. 22-23：「米国には skylark がいない。19世紀末に何度か英国から持ちこんだそうだが、ニューヨーク州ロングアイランドその他に、1、2度ひながかえった記録が残っているだけで、ついに絶滅してしまったとのこと。米国で探鳥会に参加した時、「ほら、lark がいるよ」と示されて見た鳥は、黄色い胸にV字の模様のある

- meadowlark（マキバドリ）という鳥であった。舞い上がりつつ歌い、歌いつつ舞う‘揚げヒバリ’の歓喜の歌は、アジアとヨーロッパのものである」。
- 25 『小学館ランダムハウス英和大辞典（第二版）』（小学館、1995）、p. 1677.
- 26 アメリカのマキバドリにはヒガシマキバドリ（Eastern Meadowlark）とニシマキバドリ（Western Meadowlark）の二種がいる。両者の鳴き声に関してはMiklos D. F. Udvardy, *The Audubon Society Field Guide to North American Birds: Western Region* (Alfred A. Knopf, 1977), p. 548に次の説明がある：“(Eastern Meadowlark’s) song is a clear whistle rendered as *spring o’ the year*; it is very unlike the melodious bubbling of the western species.”
- 27 James Woodress, *Willa Cather: A Literary Life* (Univ. of Nebraska Press, 1987), p. 259: “When she wrote for the novel in 1932, however, she realized that the title had been a mistake, because readers thought the lark song referred ‘to the vocal accomplishments of the heroine’ . . .”
- 28 James Woodress, *Willa Cather: A Literary Life*, p. 259.
- 29 James Woodress, *Willa Cather: Her Life and Art*, p. 169: “The singing lark is a motif that recurs many times in Willa Cather’s life and fiction and always symbolizes desire, aspiration, and longing.”
- 30 Cf. James Woodress, *Willa Cather: A Literary Life*, pp. 233-234: “Evening and the flat land, / Rich and somber and always silent; / The miles of fresh-plowed soil, / Heavy and black, full of strength and harshness; / The growing wheat, the growing weeds / The toiling horses, the tired men; / The long empty roads, / Sullen fires of sunset, fading, / The eternal, unresponsive sky. / Against all this, Youth, / Flaming like the wild roses, / Singing like the larks over the plowed fields, / Flashing like a star out of the twilight; / Youth with its unsupportable sweetness, / Its fierce necessity, / Its sharp desire, / Singing and singing, / Out of the lips of silence, / Out of the earthy dusk.”
- （豊かな、陰鬱な、して静まりかへる黄昏と平原、力と厳しさに満ち、重く黒い幾マイルもつづく新たに耕された土、育ちゆく麦、伸びゆく雑草、孜々と働く馬、疲れた人々、遙かにつづく人けな路、薄れゆく落日のにぶい火、永劫の、答へなき大空。すべてこれに対して、青春は、野薔薇のごとく燃え立ち、耕された畑の上を飛ぶ雲雀のごとく唄ひ、黄昏の空の星のごとく閃く。支えられない新鮮さと、凄まじい宿命と、さかしき願望とを持って、青春は沈黙の唇より、地上の黄昏より、絶えず唄ひつづける）。訳文はウィラ・キャザー『おお、開拓者よ！』岡本成蹊訳（改造社、1960）より引用。
- 31 上島建吉解説注釈『ロマン派詩選』（研究社小英文学叢書、1967）、pp. 48-52.
- 32 川和高斌『英鳥詩選』（泰文堂、1971）、pp. 76-84.
- 33 『草枕』、『夏目漱石全集（第2巻）』（筑摩書房、1975）、p. 135.
- 34 ジャン＝ポール・クレベール『動物シンボル事典』、p. 294.
- 35 中勸助『鳥の物語』（1985、岩波文庫）、p. 107.
- 36 同上、p. 118.
- 37 *The Golden Treasury* IV/1（大修館書店、1967）、p. 100.
- 38 『ワーズワース詩集』田部重治選訳（岩波文庫、1981）、p. 202.
- 39 アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』、p. 386.
- 40 小川和夫『英詩——鑑賞と分析』（研究社、1968）、p. 138.
- 41 J. C. クーパー『世界シンボル辞典』岩崎宗治・鈴木繁夫訳（三省堂、1992）、p. 105.
- 42 伊東四郎『四季の博物誌』、p. 85.
- 43 阿部瑞軒『和鳥の飼い方』（泰文館、1972）、pp. 116-117.
- 44 *Fables of Aesop*, translated by S.A. Handford, (Penguin books, 1975), p. 83.
- 45 『イソップ寓話集』中務哲郎訳（岩波文庫、1999）、pp. 241-242.
- 46 *Birds of Field and Forest*, illustrated by E. Demartini and introduced by O. Stepanek (Spring Books, 1965), p. 68.
- 47 アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』、p. 386.
- 48 ジャン＝ポール・クレベール『動物シンボル事典』、p. 294.

- 49 ピーター・グッドフェロー『シェイクスピアの鳥』、p. 57.
- 50 *Romeo and Juliet* (3, 5) in *The Complete Works of William Shakespeare: His Plays and Poetry* (Creative Multimedia Corporation, 1992). 以下シェイクスピアからの英語の引用文はこの CD-ROM 判による。
- 51 シェイクスピア『ロミオとジュリエット』小田島雄志訳 (白水Uブックス、1994)、pp. 140-141.
- 52 アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』、p. 386.
- 53 シェイクスピア『夏の夜の夢』小田島雄志訳 (白水Uブックス、1995)、p. 20.
- 54 シェイクスピア『ヴェニス商人』小田島雄志訳 (白水Uブックス、1988)、p. 165.
- 55 シェイクスピア『ロミオとジュリエット』小田島雄志訳、p. 139.
- 56 シェイクスピア『夏の夜の夢』小田島雄志訳、p. 109.
- 57 ピーター・グッドフェロー『シェイクスピアの鳥』、p. 58.
- 58 シェイクスピア『タイタス・アンドロニカス』富原芳彰訳、『シェイクスピア全集 (第6巻) 悲劇1』(筑摩書房、1985)、p. 37.
- 59 シェイクスピア『シンペリン』小田島雄志訳、『シェイクスピア全集 (VI)』(白水社、1981)、p. 434.
- 60 シェイクスピア『ヴィーナスとアドニス』本堂正夫訳、福原麟太郎・中野好夫監修『シェイクスピア全集 (8)』(筑摩書房、1969)、p. 223.
- 61 チョーサー「騎士の話」、『カンタベリー物語 (上)』西脇順三郎訳 (筑摩文庫、1988)、p. 58.
- 62 シェイクスピア『シンペリン』小田島雄志訳、『シェイクスピア全集 (VI)』、p. 405.
- 63 シェイクスピア『リア王』小田島雄志訳 (白水Uブックス、1994)、pp. 178-179.
- 64 シェイクスピア『ソネット集』高松雄一訳 (岩波文庫、1989)、p. 45.
- 65 ミルトン『失樂園 (上)』平井正穂訳 (岩波文庫、1981)、pp. 231-232.
- 66 W. H. Hudson, *Nature in Downland* (J. M. Dent & Sons, 1951)、p. 151.
- 67 W. H. ハドソン『鳥たちをめぐる冒険』、p. 30.
- 68 ジェイムズ・E・ハーディング『シェイクスピアの鳥類学』、p. 153.
- 69 *The Oxford Dictionary of Quotations* (Oxford Univ. Press, 1990)、p. 103.
- 70 山内義雄・矢野峰人編『上田敏訳詩集』(岩波書店、1994)、p. 77.
- 71 土居光知・福原麟太郎・山本健吉監修・成田成寿編集『英語歳時記 (春)』、p. 43.
- 72 平井照敏編『新歳時記 (春)』(河出文庫、1989)、p. 232.
- 73 石田憲次「イギリス文学概観」、『英米文学史講座 (第八巻) : 十九世紀II (1836-1901)』(研究社、1967)、p. 19.
- 74 同上、p. 12.
- 75 今井宏「イギリスの歴史と地理」、小池滋監修『読んで旅する世界の歴史と文化 : イギリス』(新潮社、1998)、p. 33.
- 76 波里光徳『和鳥』(日本飼鳥文化協会、1968)、p. 200.
- 77 金子兜太・川崎展宏選『鳥獣虫魚歳時記 (春夏)』(朝日新聞社、2000)、p. 24.
- 78 『高知新聞』平成12年8月1日夕刊

平成13年 (2001) 10月3日受理

平成13年 (2001) 12月25日発行